

初発見！北白川廃寺の西端

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真 1 北白川廃寺西端の溝と建物跡（南から）

はじめに 令和 6 年、京都市文化財保護課は北白川廃寺で発掘調査をおこないました。北白川廃寺は京都市内の遺跡の中でも早くに発見されましたが、市街地化した時期も早かったため、現在に至っても多くの謎が残されています。今回の発掘調査では、初めて寺域西端の状況を明らかにすることができました。

調査の歴史 北白川廃寺は左京区北白川に所在する 7 世紀後半に建てられた寺院の跡です。正式な寺名がわからないことから、地名「北白川」に「廃寺」を付して北白川廃寺と呼んでいます。昭和 9 年（1934）、土地地区画整理に伴う掘削によって

瓦積基壇^{かわらづみきだん}が露出している状況を京都帝国大学東方文化研究所の研究員、羽館易氏^{はたちおさむ}が発見し、その存在が知られました。この時に発見された基壇は本尊を安置した金堂のものと推定されます。発掘調査によって発見された基壇の規模は東西 36.1 m、南北 22.8m に及びます。これは当時の国家の中枢であった大和（現在の奈良県）に存在した大寺院の大半



図 1 北白川廃寺の伽藍復元と令和 6 年調査位置

よりも規模の大きいものでした。なお、基壇の一部は京都大学構内(旧文学部陳列館前)に移築復元され、現在でも見学することができます。

昭和50年(1975)には白川通を挟んだ西側で塔の基壇が発見されました。これにより、東側に金堂、西側に塔を置く伽藍が復元されました。しかし、講堂や四至を限る施設などは発見されず、寺院の全体像はわからないままとなりました。また、これまでに出土した瓦のうち、もっとも古いものは山田寺式軒丸瓦(写真4)で、これは640年代に造営された山田寺(奈良県桜井市)の創建瓦よりもやや新しいタイプの瓦です。このことから、北白川廃寺の創建は7世紀第3四半期だと考えられてきました。

今回の調査成果 令和6年の発掘調査は、北白川廃寺の遺跡範囲西端でおこないました(図1)。大正時代の都市計画図からは遺跡範囲西端に段差があることが読み取れ、現在でも調査地と西側道路には50cm程度の段差があります。現

在も残る地形、地割からここを北白川廃寺の西端と推定してきました。これまでに西端ライン上でおこなった発掘調査はなく、今回が初めての調査でした。

この調査で、南北方向の複数の溝と1棟の建物を発見しました(写真1)。発見した溝は3条4時期あり、7世紀中葉～後半→7世紀末～8世紀初頭→8世紀末～9世紀初頭→9世紀と考えています。このうち7世紀末～8世紀初頭の溝からは多量の瓦片が出土しました(写真2)。

溝に隣接して発見した建物は南北5間以上、東西2間以上の総柱の掘立柱建物です。南北両側と東側は調査区外になるため、これ以上の規模になる可能性もあります。総柱であることから、複廊の回廊や倉庫などいくつかの可能性がありますが、溝とともに寺域の西端を区画するものであったことには疑いがありません。

出土遺物では、素弁十葉蓮華文そべんじゅうようれんげもん軒丸瓦が目を引きます(写真3)。

令和2年に北側50mの地点でおこなった発掘調査で1点出土事例があり、2点目の出土です。この瓦は従来知られていた最古の瓦、山田寺式軒丸瓦よりもさらに古く位置付けられるもので、主要伽藍に先立ち何らかの施設が存在したことを想起させます。

調査でわかったこと 今回の発掘調査によって、初めて北白川廃寺の西端が確定しました。東端、北端はこれまでに見つかっていません。南端の溝は緊急的な短期間調査での検出で、情報量が少ないため、今回の西端の溝は確実な調査状況によって発見した初めての北白川廃寺の外周施設とすることができます。この溝は何度も掘り直され、平安時代まで区画を維持し続けたことがわかります。また、北白川廃寺の存続期間半ばである7世紀末～8世紀初頭に、多量の瓦が溝に廃棄されたことも判明しました。従来、9世紀に塔基壇を瓦積らんせきづみから乱石積に改装したことがわかっていましたが、それとは別の時期にも多量の瓦が不要となるような、施設の改変がなされた可能性があります。さらに、7世紀前半にさかのぼる素弁の軒丸瓦の出土は、従来考えられてきた北白川廃寺の創建時期に再考を促すものです。

早くに市街地化したことから、なかなかその実態がつかめない北白川廃寺ですが、小規模の調査であっても積み重ねてきたことで、徐々にその姿が明らかになってきています。

(京都市文化財保護課 新田和央)



写真2 瓦出土状況(南東から)



写真3 素弁十葉蓮華文軒丸瓦



写真4 山田寺式軒丸瓦